

佳作

## 一冊の絵本

岡山県 岡山芳泉高等学校一年 安井 絵里果

『かあさんのこもりうた』というクマの親子の絵本がある。三頭の子グマは、母グマが自分たちへの思いを込めてつくった子守歌を聞いて、いつも眠っていた。しかしある日、母グマが森を襲った嵐の犠牲になってしまふつらくて心が挫けそうになっていた子グマたちだが、子守歌に母の愛と希望を見だし、悲しみから立ち上がるという話だ。これだけでも感動する話なのだが、この絵本が誕生した背景を知り、ますます感動した。それは、ある一つのエピソードである。

そのエピソードとは五年前に起こった東日本大震災である。当時、私は学校から帰ってテレビを見て驚いた。それから毎年三月十一日には震災のことを思い出し、心を痛めている。そんなとき、母にすすめられてある新聞の記事を読んだ。それが『かあさんのこもりうた』についての実話の記事だった。東日本大震災でお母さんを亡くした小学三年生のまだ幼い女の子の元に、一通の手紙が届いた。その手紙の差出人は亡き母。小学校へ入学す

る娘にランドセルを購入した際、母がわが子に宛てた手紙を書き、それを千日後に配達する「未来へつなぐタイムレター」という企業サービスによるものだった。このサービスは本来、入学当初の気持ちを思い出せるようにという会社のねらいのもと、起ち上げられたものだった。今回の東日本大震災で親を亡くした子に届いたというその手紙。親を亡くしてから悲しみに暮れていた子も大勢いた。しかしこの手紙を読んでから「何だかお母さんに会えるみたい」と大喜びし、学校に行きたくないと思っていたり、心を閉ざしていた子の気持ちも前向きに変わり、もう学校に行きたくないとわがままを言う子もいなくなつたという。お父さんは、「三月十一日で家族の時計は止まっていたけれど、この手紙で前に進んでいける気がします」と話したという。私はこのサービスを初めて知った。そして心が温かくなった。「手紙」というものは本当の気持ちをしっかり伝えてくれるものである。それが母と子であればなおさらだ。普段一緒に生活していると母に手紙を書くということはそうそうない。しかし今回この記事を読み、家族の絆を深く感じ言葉を大切にしたいなと思つた。

話は戻るが、この話をきっかけに『かあさんのこもりうた』という絵本は生まれたのだ。あの日から五年半が経とうとしている今も、東北の方々から「この震災…」との言葉をよく聞く。そこからは、震災から何千日経と

うが、日々を一生懸命に生きてきた思いがこもっている。大好きだった母との突然の別れ。この悲しみの大きさを簡単に語ることはできない。しかし、たとえ会うことはできなかったとしても、母からの愛情や思いが違う形で届くことがある。今回のように、その思いを受け取ることで、子どもたちの心は強く、そして優しくなれるのかもしれないと私は思う。このような温かい感情は決してうすれることはない。むしろ成長していくにつれて強くなっていくのではないだろうか。

実際にこの絵本を借りて読んだ。表紙の絵はとても優しく安心感がある。そして読み進めていくとあまりの切なさ涙が止まらなくなる。しかし読み終わった後、とても悲しいはずなのに心がポカポカしていた。それはきっと母の大きな愛情を感じることでできたからだと思う。私も自分の子が生まれたら、絶対に読ませたい。母と父、そして兄弟がいることが当たり前でないこと。一日一日がいかに大切であるかということ。日頃から感じている感謝をきちんと伝えること。簡単そうで難しいこと。ふとしたときの「ありがとう」で全てが伝わることもある。私を含み、みんな相手の目を見て「ありがとう」と言えたら素敵だなと思う。「三月十一日」をいつも心に、そして家族、友人との絆を支えに、希望の未来へとつながる一歩、一日を一緒に歩んでいきたい。